方向

第一六一号　一九九四年一月二三日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

暗黒の世界

―法華経巡礼　八八―

1993 12 10　原田憲雄

07-09. あなたは偉大な医師、無上のかた、無限のカルパをかけて覚られた、
肉体をそなえた一切を救うために。そしてここに満たされた、あなたのこのよい願いは。（八）
希有のことを、あなたはこの十中劫の間になしとげられた、ひとつの座に坐ったまま。
その間に体をまったく動かされなかった、手や足や、他の部分もまた。（九）
あなたの心は静かになり、つねに不動であり、戦慄することなく、
あなたはいかなるときも散乱することなく、完全な静寂におられます、汚れをはなれて。（一〇）
めでたくも、あなたは安全に首尾よく、なんの妨げもなく無上の菩提に到達され、
われわれに、福徳がこのようにもたらされたのです。ありがたいことです、人中の獅子よ。（一一）
導師がおられないと、衆生はあらゆる苦悩をうけます、目のない者に幸うすいように。
かれらは苦悩を終極させる道を知らず、解脱のための精進をしませんでした。（一二）
悪趣は長夜にわたって増大し、天神の集合も減損し、
ジナの声はけっして聞かれず、暗黒の世界となったのです、この一切の世界は。（一三）

あなたは今ようやく到達されました。世間をよく知るかたよ。無上で汚れのない吉祥の地位に。
われわれも世間が、困難をこえだされました。わたしたちはあなたに帰依します、教主よ。（一四）

mahā-bhiṣaṭko 'si anuttaro 'si ananta-kalpaiḥ samudāgato 'si /
uttāraṇārthāy 'iha sarva-dehināṃ paripūrṇa saṃkalpu ayaṃ ti bhadrakaḥ //8//
suduṣkarā antara-kalp 'ime (W:imān) daśa kṛtā ta (W:kṛtāni) ek 'āsani saṃniṣadya /
na ca te 'ntrā kāyu kadā-ci cālito na hasta-pādaṃ na pi cānyad-aṅgam //9//
cittaṃ pi te śānta-gataṃ susaṃsthitam aniñjaya-bhūtaṃ sada aprakampyam /
vikṣepu naivāsti kadā-cit (W:kadā-ci pī) tava atyanta-śānta-sthitu tvaṃ anāsravaḥ //10//
diṣṭyā 'si kṣemeṇa ca svastinā ca avihetḥitaḥ prāpta imāgra-bodhim /
asmākam ṛddhī iyam eva-rūpā diṣṭyā ca vardhāma narendra-siṃha //11//
anāyikeyaṃ praja sarva-dḥkhitā utpāṭitākṣī va nihīna (W:vihīna) -saukhyā /
mārgaṃ na jānanti dukhānta-gāminaṃ na mokṣa-hetor janayanti vīryam //12//
apāya vardhanti ca dīrgha-rātraṃ divyāś ca kāyāḥ parihāṇa-dharmāḥ /
na śrūyate jātu jināna śabdas tamo 'ndha-kāro ayu sarva-lokaḥ //13//
prāptaṃ ca te loka-vidū ihādya śivaṃ padaṃ uttam 'anāsravaṃ ca /
vayaṃ ca lokaś ca anugṛhītāḥ (W:anūgṛhītāḥ) śaraṇaṃ ca tvā eti vrajāma nātha //14//

この（一三）は、クマーラジーヴァが「長夜増悪趣　減損諸天衆　従冥入於冥　永不聞仏名（長夜に悪趣を増し、もろもろの天衆を減損し、冥きより冥きに入り、永く仏の名を聞かず）」と訳し、和泉式部が「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月」と歌ったところである。

07-10. さて、比丘たちよ、これら十六人の王子たちは、まだ幼いただのこどもだったが、あの世尊・大通智勝如来・尊敬すべき・正しく覚ったひとを、ぴったりした偈によって、まのあたりに讃嘆し、世尊にこのように請うた。「教えの輪をまわして、世尊は法をお説きください。スガタは法をお説きください。多くの人人の利益のために、多くの人々の幸福のために、世間に同情し、大衆の利益のために、神々や人間の幸福のために」と。そこでそのとき、かれらは次の偈を唱えた。

atha khalu bhikṣavas te ṣoḍaśa rāja-kumārāḥ kumāra-bhūtā eva bālakās taṃ bhagavantaṃ mahābhijñājñānābhibhuvaṃ tathāgatam arhantaṃ samyak-saṃbuddhaṃ ābhiḥ sārūpyābhir gāthābhiḥ saṃmukhaṃ abhiṣṭutya taṃ bhagavantam adhyeṣante sma / dharma-cakra-pravartanatāyai deśayatu bhagavān dharmaṃ deśayatu sugato dharmaṃ bahu-jana-hitāya bahu-jana-sukhāya lokānukampāyai mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manaṣyānāṃ ca / tasyāṃ ca velāyāṃ imā gāthā abhāṣanta//

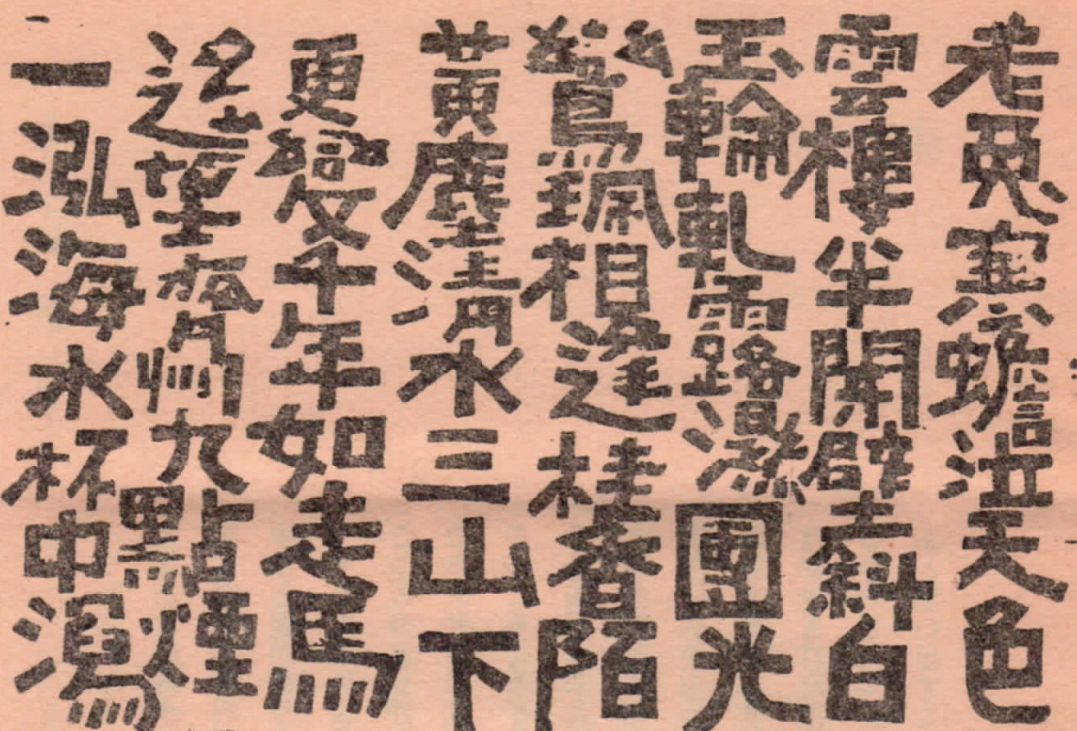
07-11. 法をお説きください、百のめでたい相をもつかた、導師、たくいなきかた、大なる聖仙よ。あなたが獲得された最勝無比の知識を説き明かしてください、神とともなる世間の人々に。（一五）わたしたちと、この衆生たちを救い、お説きください、如来たちの知識を。

わたしたちがこの無上の菩提に到達できるために、またこれらの衆生たちも。（一六）
あなたはすべてご存じです、一切の生命を持つものの、
修行も、知識も、願望も、過去の行為も、功徳も、
信解も、あなたはご存じです。どうぞ転じてください、無上最勝の法輪を。（一七）

deśehi dharmaṃ śata-puṇya-lakṣaṇā vināyakā apratimā maha-ṛṣe /
labdhaṃ ti jñānaṃ pravaraṃ viśiṣṭaṃ prakāśayā loki sadevakasmin //15//
asmāṃś ca tārehi imāṃś ca sattvān nidarśaya jñānu tathāgatānāṃ/
yathā vayaṃ pi〈W.pi〉 imam agra-bodhim anuprāpnuyāmo 'tha ime ca sattvāḥ //16//
caryāṃ ca jñānaṃ pi ca sarva jānasi adhyāśayaṃ pūrva-kṛtaṃ ca puṇyam /
adhimukti jānāsi ca sarva-prāṇināṃ pravartayā cakra-varaṃ anuttarām //17// iti

07-12. さてまた、比丘たちよ、あの世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しい覚りをひらいたかたが、無上の菩提を覚っておられるあいだに、十方の五百万億の世界は六種に振動し、大光明に照らし出された。

tena khalu punar bhikṣavaḥ samayena tena bhagavatā mahābhijñājñānābhibhuvā tathāgatenaārthatā samyak-saṃbuddhenānuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisaṃbudhyamānena daśasu dikṣv ekaikasyāṃ diśi pañcāśal-loka-dhātu-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇi ṣaḍ-vikāraṃ prakampitāny abhūvan mahatā cāvabhāsena sphṭāny abhūvan /



山本のぶを刻（一九九四・一）

李賀　　天を夢みる

老いぼれ兎　凍えるガマ　天上で泣くのだろうか
雲の楼閣なかば開け　壁は斜めに白く輝く
玉の車輪は露にきしり　光の球がしっとり濡れ
鸞鳳の帯飾り垂れ　天人たち　木犀かおる巷ゆきかう
黄塵と清水が　蓬莱・方丈・瀛洲の三神山の辺で
入れかわり立ちかわる　千年だってまるで走り去る馬
はるばると見下ろせば　中国は　ちいさくかすむ九つの点
海原も　杯にしたたりおちる　一滴のみずだ

夢で天上にのぼり、その天上世界を描写するのが、この詩の前半で、後半は、天から見下ろした地上の時間と空間のちっぽけなことを歌っている。韓愈にも同様の作があり、もっと人間くさく、それもおもしろい。（1994 01 13　原田憲雄）

大豆かす

1994 01 02

原田　慶

大豆かすの積み上げられた
小さな駅の構内で
子ども達がまりつきをしていた
小さくて硬いまりはよくはずんで
こつこつと音がした
幼い子どもが真似をしてじゃがいもをもって来たが
ころころころがるばかり
その後どうしたかを憶えていない
学校の先生や村のはたらきてが大勢
小さい駅から兵隊に発った
大豆かすを二度と見なかったけれど
はがれされた爪のようにしんなりとしたもののの
ひからびた匂いを
ふと思い出すことがある

粘土

1994 01 03

原田慶

水車をまわす水が
どこから来ていたのかを知らない
水車の真下にこぼれ落ちている水の
向こう側の水車小屋の床下は
青い上質の粘土層だった
もぐりこんでいるところを見つかれば
恐ろしい人につかまると知っていた
その人を見たことがなかったから
いつそう恐ろしかったけれど
地獄へ行くほどの決意で水をくぐり
青い粘土を採って逃げた
どんどん粘土を掘れば
小屋が倒れるということがわからなかった
水車小屋はいま跡形もない

雪上の顔

1994 01 04

原田　慶

雪の上に顔を押しつけると
顔の跡がついた
雪は凍て
その上にまた積もり
みんなの顔は雪に埋もれた

いちばん上手につけたのはだれだったろう
そんな子どもの頃の
わたしの顔を知らない
ただ一枚だけの写真を見ると
野原に生えたゼンマイのように
とりとめもなく暗い

植物のように生きていたわけではない

恐ろしいことやいやなことがたくさんあって
狼や狐たちのようにひたすら
小心に生きていたのだ

わたしの魂は
あの頃の混沌に戻り
うずくまつていようとして
いつも隙をねらっている

1994 01 13　　原田　慶

犬

橋のすぐ傍の川のふちにある家の玄関に、「犬」という字を印刷した紙が貼ってある。
その犬はたいていは見えないが、時々、玄関先に出されているのに出あう。栗色のふつうによく見るような犬だが、小柄で、ほっそりとして毛並に艶があり、しなやかな体つきが少年を感じさせる。その清潔なことで、どれほどよく人の手で洗われ磨かれ、かわいがられているかを知ることができた。外に出されている時はその犬の

ために、マットか大きいタオルが敷かれている。犬はいつも熱心に、マットやタオルのかどをくわえて引っ張っているのでどれも端が破れている。いつの頃からか、犬が噛むためのたぶんゴムで作った骨のようなものがマットの上に置かれるようになった。その骨を噛んでいるのを見たことはないが、マットの端を引っぱることはやめたようである。

その橋は東西に掛けられている七メートルほどの長さのもので、川床がずいぶん深い用水路であるが、橋を渡れば西も東もほとんどすぐ家に突き当たり、狭い道路が南北に通っていて、直角に曲がらなければならないところだから、その橋の上で人や自動車に出あったことがない。多くは利用されることのない橋のようである。

そのような所だからというのではないのだろうが、わたしは一年あまり週に三回、ここを通っているが、その犬の声を聞いたことがない。犬が外に出ているときに、近くを通っても、犬は振り向きもしない。玄関の戸が閉まっていて、「犬」という文字だけを見て通る時にも、中に犬の気配がない。私の家の近所には大小いろいろな犬がいて、家の中からでも人の足音に吠えたてている。おかげで郵便が配達されていることに気がついたりするのだが、犬とはそのように大きな声を出すものだと思っていた。だから傍を通っても無関心で、自分のことだけに熱中しているこの無防備な犬が、私には気になって仕方がなかった。

あるときその犬がマットの上ではなく、もっと外の道路のアスファルトの上に腹ばいになり、あごをぺったりと路上につけて、目を開いたままじっとしていた。わたしは犬のすぐ近くをゆっくりと自転車で行った。目玉も動かさない耳も動かない、そのままの姿勢でただ前を見つめてぴくりとも動かないのである。目はうつろなどと

いうのではなく、はっきりと何かをみているような目をしていた。と言っても、その視線上に何か見るべき物があるわけでもない。用事をすませて三十分くらい後の帰りにも、犬は、わたしが行くときに見たのとまったく同じ形で、あごを伸ばしたままだった。

「あんたはどうして犬に生まれたの、人間だったらわたしでもこんなにして、行きたいところへ行けるのに」

あまり不思議だったので、おもわずため息が出そうだった。犬が何を考えているのか、ただぼんやりしているのか、それともわたし達には見えない何かを見ているのか、それは分からない。ただ、犬が人のかたちをしているかぎり、行きたい所へかってに出かけて行くことはできないのだとあらためて考えた。

すぐ傍を何かが通るのに、身じろぎもせず体を投げ出して、あれほど無関心でいられるものだろうか。ふつう、思わず身をよけたり、緊張したりするのではないか、大胆不敵と言うのか、それとも聞こえないのだろうか。

それから後のある日、めずらしくその犬が、鎖をいっぱいに引っ張って外に立っているのに出あった。わたしが近づくと、こちらを見てずっと目で追うように首を動かしたのである。わたしは胸の中がほっと温かくなるような気がして犬の顔を見た。ほんとうに美しい犬だと思った。「ワン」とも言わなかったが、その様子から考えると聞こえるようである。玄関先に犬の部屋である箱が出してあった。プラスチックか何かで作られた暖房付きのペットハウスである。それもよく掃除されて居心地よさそうな緑色の箱だった。

それからも時々、犬が外に出ているのを見るけれど、やはり以前とおなじように振り向きもせずあらぬ方を見ている。

先日その家の前を通った時、ちょうど二階の窓の戸が開いた。ふと見上げると、赤と緑と白と紺色の布を接ぎ合わせたシャツを着て、髪を金色に染めた青年がちらっとのぞいてすぐ戸を閉めた。玄関は閉まっていて、「犬」という小さな張紙が目につくだけで、何の物音もしない。その時までにこの家の人をついぞ見かけなかったが、通りすがりの他人の家のことは、長い間見ていてさえ、考えもつかないもののようだなあと思った。その犬がどうして声を出さないのか、わたしはやはり気になる。

紙屋川

1994 01 15　　原田　慶

紙屋川は、平安期に紙屋院が置かれて、官庁で使う上質の紙が漉かれていたのでそう呼ばれるのだそうである。以前に読んだ小説の中に、紙漉きの小屋の様子が書かれていて。他の土地から技の巧みな人を呼んできて、ある女院だったか中宮だったかのために、美しい模様の入った紙を漉いて献上しようというような話をしている場面があった。その小説から、平安期の紙屋川を想像したせいか、わたしはこの川に不思議な魅力を感じている。

千年も昔に紙漉きの人達が氷るような冷たさの中で、どんなに心を傾けて仕事をしたのだろうかと思う。どんな仕事でも職人わざと言うものには、それ一筋に生命をかけてきたその人の魂がこめられている。大工さんや左官さんとでも話してみると、感嘆するような作業を何でもなくやっているものである。紙屋川は鷹ケ峯の山中か

ら流れ出てくるが、このあたりは雪も多く、今ではずいぶん家も増えたが、市中としてはやはり寒いところである。ここから流れて出る冷たい水が、紙漉きには必要だったのだろうか。

平安期の紙屋院が廃止された後、室町期になって、この地で反故紙が漉き返されるようになったのだそうで、今でいうオフィス反故紙で、墨で字が書かれていたので、その再生紙を薄墨紙とも呼んだという。この時期には紙師は紙座を組織し、上流は北野天満宮付近、下流は西ノ京円町付近に住み、そこを宿師村といったが、松本章男氏は『京都百人一首』に堯孝（一三九一―一四五五）の、

紙屋川あたりの森の雫さへまなくおちそふ五月雨のころ

を掲げ、その意は、

紙屋川はあたりの森へ紙を漉き返す水の音をひびかせている川です。梅雨どきの今は、深い森の木立の雫まで川床へ滴下して音をたてるので、いっそう風情が増すように思えます。

と説明しておられる。

当時の紙屋川の風景や人々の暮しが目に浮かぶようだけれど、現在では歌にあるような流れはよほど上流に行かないと見られない。鷹ケ峯のすぐふもとの鏡石町の奥のほうでは木立ちの中を流れている。ほんのしばらくすると野の小川になり間もなく開キ町に入って石組みの用水路になる。北大路をくぐって、北荒見町のあたりで公園の中をながれ、北野天満宮の西側へと流れてくる。ここには室町期。紙座の宿師村があったと言われるが、神社の反対側は川の石垣の上の更に土手の上に画家や織物関係の人の大きな屋敷があって、紙屋川は谷川のように

下のほうを流れている。この辺りの流れは天神さんの境内からお土居へ上るとよく見えるけれど、今はその川岸にも梅林ができて自由に歩くことはできにくくなっている。あまり近づくことができないぶんだけ紙屋川はひっそりとすずしげである。そこを過ぎて白梅町まで来ると川の風景は一変する。ここまでも川は見え隠れしながら流れており、石やコンクリートで固められているのだけれど、その両岸に自然が感じられた。林を抜けたり、木や草の下をくぐったりしていた。ここからは人々の中を流れて行くことになる。

白梅町は天神さんの前を東西に走る今出川通りと、マラソンでいつもテレビに写し出されるが平野神社やわら天神の間を南北に通る西大路の交わるあたりで、バスなど交通量の多いところである。今出川通りが紙屋川を渡るのが天神橋で、二車線の広い橋だけれど、紙屋川は五メートルほどの狭い川だから、橋の長さはせいぜい八メートルに足りないくらいだと思う。この下をくぐった紙屋川はいくらか急勾配を下り、後はゆるやかな傾斜を三十メートルくらい滑って、ちょっとした堰をひとつ降りて一条橋に来る。ここからしばらく川はまっすぐに行く。東岸は道が添っていて、傍に公園もあり、西側には民家や保育園などがゆったりと並ぶ。橋の上に立って眺めてみると二十メートルおきくらいに橋が掛けられて、川を中に、整った美しい町の姿をしている。その橋は南川端橋、妙林寺橋、西町橋、鍋町橋とあるが、ここまでで川沿いの道がなくなる。鍋町橋は東西に走る仁和寺街道にかかる橋で、西大路と交わる大将軍の辺りへ出る。ここも間の橋よりは交通量が多い。この橋の上から川下を見るとまた風景が変わる。

鍋町橋から川下には両川岸に隙間なく家が建ち、川は小さく蛇行を始める。すこし左へ回ってまた右へ行く。

すぐそことちょっと川下に橋が二つ見える。旧鍋町橋、きたまち橋である。その下をぐっと右へ回って、また橋が見える。それが選仏寺北橋。そこから次に見えるのが選仏寺南橋。この橋の東のたもとには赤く塗った祠が祀られている。そこから川は左へ曲がってから右へ回って行くので下流の橋は見えないが、下へたどってみると、アパートへ入るための鉄の橋があって、その上にはいつも自転車が数台とめてある。そのすぐ川下に、名前の消えていて読めない橋があり、川はそこからまっすぐに五十メートルくらいのあいだ流れて行く。西側は道路で大きな寺があるので、そのあたりは空が広いように感じる。その道が切れるところに下立売橋があり、それをくぐった川は左へ曲がって見えなくなる。下流へまわってみると新下立売橋があり、またそこから東岸にまっすぐ道路が添っていて、呼び名のない橋が二度、個人の家に入る橋が一度あって、円町に近い西ノ京橋である。丸太町通りが紙屋川を渡る橋で二車線の広さがあり、自動車がひっきりなしに通っている。この辺りに紙座のもう一つの宿師村があったということになる。川はそこから斜めに太子道で西大路と交差する。

紙屋川はこの後、西南へ大きくカーブして太秦の安井あたりで御室川へ注ぎ、天神川と呼ばれて南下するのだそうだけれど、これより下流をわたしは自分の目で確かめていない。

円町まではそれほど大した距離ではないけれど、川をたどってみるとずいぶん表情を変えていておもしろい。紙屋川が人工の川になったのは戦後のことだというが、以前からかなり川床の深い川だったそうである。わたしが若いころ編み物を習った先生が、西ノ京のこの川に近いところの人で、大雨が降るとよく水害にあったと言っておられたが、今はしっかりと護岸されているし、川床もコンクリートになっているので、水があふれることは

とはないと思う。昨年の夏の大雨の時には、さすがにこの川も水かさが増し、泥水がごうごうと大きな木の枝を押し流していた。その水が引いた後は落ちていたごみが一掃され、底の藻も流されてすっかりきれいになっていたが、今ではまた流れの下は黒っぽい藻が生え、転げ落ちたごみが散らかっていて、烏が散歩しているのを見かけることもある。しかしそれもところによって違うので、まっすぐ流れているような、より人工的なところでは、付近の人が掃除をするらしくて川はきれいになっている。

曲がりながら家の間を割って流れているところを見渡すと、ほとんどが家の背中だけれど、時には部屋のガラス戸が川のほうへ開いて、物干しが張り出していたり、サザンカや夏みかんの木が川の上へ伸びていたりする。それでもやはり壁やトタンの張りつけられた家の背ばかり見えるところは護岸の石やセメント、川床なども黒ずんで、人々の生活の汗や油が浸みこんでいるようにひっそりと侘しい。このような空間をのぞける場所というものはなかなか貴重だという気がする。

川床までの深さもところによって少しは違うように感じるけれど、選仏寺北橋の辺りで計ってみたら三メートル六十センチくらいあった。流れてゆくのだから川床が少しずつ下がって行くのは当然だけれど、どの岸も同じように一定に下がって行くとは限らないのである。

わたしは週に三度は紙屋川を渡る。わたしの通るのは下立売の辺りだけれど、日によって川の表情が変わる。橋の上に立ってこの川を見るのが好きである。川床がずいぶん低いところにあって水が少ないから、晴れた日にはただ光を反射するばかりできらきらと流れてゆくが、うすぐもりの日には空を写して這うようにゆく。三十年

くらい前にはこの水は染物の排水で濃い紺色をしていた。その頃の名残りなのか太い煙突の立っている建物が見えるが煙は出ていない。水はともかくも透明である。

紙屋川は今、人の生活に直接利用されることはないけれど、暮しの風景に深く関わりながら人々の心に何かを植えつけているに違いない。たとえ人工の用水路になってしまっていても、出あうたびにおもしろいのは、長い歴史を語ってくれるからかもしれない。

李長吉の詞

（詞という詩　六）　　1994 01 13　　原田憲雄

長吉というのは九世紀はじめの詩人李賀の字ですから、この題は「李賀の詞」ということになります。李賀には詞の作品は一首もないのに一体どういうことだと、中国の文学史をひととおり読まれたかたなら、疑われるでしょう。ところが、ちかごろ届いた中国の詞の雑誌『詞学』の第十輯に北山という人のそういう題の文章が載っているのです。短いものですからぜんぶ訳しておきましょう。

唐の詩は、李賀と李商隠が出て、はじめて濃やかで麗しくしっとりした句作りが生まれ、この濃やかで麗しくしっとりした詩句が先行したために、はじめて温庭筠の菩薩蠻が生まれた。だから唐の詞が興起したのはじつは李長吉がその先導をしたればこそであろう。李長吉は、詞を作ったことはない。ところが、ここに菩

薩蛮の四首があって、ぜんぶ長吉の詩句を集めて成立している。ならばどうして李長吉の詞といっていけないだろう。いまここに録出して詞苑における特別の趣向を紹介しておきたい。これを集めたのは江山の劉彦清、清代末期の詞人で、作品集に『鴎夢詞』がある。

1

落花起作廻風舞　（残糸曲）　落ちた花が起きあがりつむじ風に舞いだせば
桂郎謝女眠何処　（牡丹種曲）　業平と小町はどこで眠るおつもり
燕語踏簾鉤　（賈公閭貴壻曲）　簾の鉤にとまって燕はさえずり交わすのに
羅幃午夜愁　（七夕）　とばりのうちの夜中のかなしみ

行雲愁半嶺　（蜀国絃）　竹にかかる雲かなしげな嶺のなかば
路重塗泥冷　（答贈）　露おもく衣の金泥の冷たいこと
星尽四方高　（感諷　四）　星きえて四方の空が高くなり
飛糸送百労　（感春）　糸遊は百舌鳥を送り出す

2

濃蛾▲柳香唇酔　（洛姝真珠）　濃い眉は青柳かさね香ぐわしい唇は酔い
玉釵落処無声膩　（美人梳頭歌）　玉のかんざし落ちたところはじっとりと音もなく

酒色上来遅　（花遊曲）　酔いの頬にのぼる遅さ
愁紅独自垂　（黄頭郎）　花のくれない　悲しげに　うなだれている

春風吹鬢影　（詠懐　一）　春風は鬢の影を吹き
小樹開朝逕　（南園　十三）　小さな木立に朝の径がひらけ
骨出似飛龍　（悩公）　骨の突き出たところは飛龍みたい
宵寒薬気濃　（昌谷読書示巴童）　宵の寒さ　煎薬のにおいの濃いこと

3

不須浪飲丁都護　（浩歌）　がぶ飲みはおやめなさい　丁都護さん
桃花乱落如紅雨　（将進酒）　桃の花がみだれ落ち　くれないの雨みたいです
掃断馬蹄痕　（憶昌谷山居）　馬の蹄の跡も消え
金魚挂在身　（嘲謝秀才　一）　でも勲章は身に着けて

憂来何所似　（追和何謝銅雀妓）　この悲しみは何にたとえられましょう
尚復牽情水　（安楽宮）　衣裳の係が清水を汲みました
春月夜啼鴉　（過華清宮）　春の月に鴉が鳴き

杯闌玉樹斜　（答贈）　酒たけなわに玉樹のように傾くお方

4　黄池竹冷芙蓉苑　（十二月楽辞九月）　竹黄ばみ池冷えて芙蓉は枯れ
憶君清涙如鉛水　（金銅仙人辞漢歌）　君を思えば清い涙は鉛のようにしたたりおちる
誰識怨秋深　（巴童答）　だれが知ろう　秋をあわれむ心の深さ
南城罷擣砧　（嘲謝秀才　三）　町の南では砧うつ音もやんだ

夜遙燈焰短　（嘲謝秀才　三）　夜ふけてともしびの焔みじかく
身与塘蒲晩　（還自会稽歌）　わが身は池の蒲の穂とともに衰える
沙冷一双魚　（追和柳惲）　つがいの魚に砂暖かく
仙人待素書　（釣魚詩）　仙人の手紙でも待つとしようか

以上です。「ぜんぶ李長吉の詩句」とはいうものの、もとの詩句そのままではなく、文字のかわっているところがあります。次に掲げるものは（　）内がもとの李賀の語です。

1　桂郎（檀郎）　行雲（竹雲）　路重塗泥冷（露重金泥冷）

2　▲柳（畳柳）

3　尚復牽情水（尚服牽清水）

4　黄池竹冷芙蓉死（竹黄池冷芙蓉死）　沙冷（沙暖）

拠った本による文字の異同もありましょうが、句を集めた劉氏が、詞としての作品にととのえるためにした変更も含むことでしょう。北山氏がこの文章を書くために使った材料が不明で、これ以上はわかりません。

わたしの訳は、李賀のもとの文字に従っています。劉氏の集句どおりならすこし変更せねばならないところがありますが、それは読者のお楽しみに残しておきましょう。

なお、陳乃乾の編集した『清名家詞』の『鴎夢詞』の説明によると、劉氏は、名は履芬、彦清は字で、泖生と号し、浙江江山の人で、一八二七年に生まれ、一八七九年に五三歳で死にました。嘉定県の知県というから知事代理のようなことをしているとき、県民で警察に捕えられ殺された者がありました。それが無実だと分かりながら救うことができなかったので、おおいに慟哭し、自分の首を刎ねて死んだ、ということです。詩詞に巧みで、文もまた「淵雅雄厚」であり、文集に『古紅梅閣集』がある由。『鴎夢詞』は『清名家詞』に収めるものを読みましたが、文集は見ることができませんでした。

集句は、すでに成立した作品の断片を集めて、もとのものとはまったく別の作品をつくるという、文学技法の一つです。材料にする既成の作品は、一人のものでも多数のものでもかまいません。中国では早くから普及し、そのような作品ばかり集めた『香屑集』という詩集もあるほどです。中国ではこれを文字の遊びにすぎないものとしか扱っていず、あまり重視していませんが、過去の文学に詳しい作者でなければ成功しません。中国の清朝

以前の文学は、文字の遊びとされない作品でも、古典のある作品全部を敷き写ししたり、古典の断片や語句を織り込むことを正統の技法として要求する習慣がありました。一種の古典主義です。この方法が伝わって日本で成功したものがあります。謡曲です。日本独特のものとされているようですが、技法からいえば中国伝来のものです。個性を尊重し、他との差異を強調する今の文学観からすると不思議に思えるかもしれませんが、それにはそれとしての長所もあり、欧米の文学者でもT・S・エリオットやエズラ・パウンドの詩には、集句的な方法がつかわれているように思われます。文学以外の、造形芸術や音楽では、前衛と称するひとびとが、他人の作品をすこし変形したり、あるいは断片をくみあわせた作品をつくって、方法の新しさを誇っているのをみかけます。当事者は気づいていないのかもしれませんが、あれは集句と同じ技法だと思います。

李賀というと「唯美主義」のレッテルを貼ってすます傾きが今もあり、文字の遊戯というとキザな人間が目に浮かびがちですが、李賀の詩から集句で菩薩蛮の詞をつくった劉氏は、憤りを発すればおのれの首を掻き切って悔いない実生活上の志士であり、集句をつくることによって詞の歴史における李賀の先駆的な位置を暗示し、ひいては、中国の極めて保守的な古典主義的技法が前衛の技法として世界の芸術に転生しうる視野をひらいたすぐれた批評家といえるのではないでしょうか。「長安に男子あり、二十　心すでに朽つ」の句を愛し、『近代能楽集』を書いて切腹した三島由紀夫が連想されなくもありません。

さて、温庭筠の名がでてきたので、そのひとの作品に移るとちょうどいい運びなのですが、温氏は詞の歴史ではたいへん重要なひとですから、相当の紙数を費やす必要があります。それでここでは、かれに前後する二人の

作者を紹介しておきましょう。まず鄭符です。

符は九世紀なかごろの人で、武宗皇帝の校書郎となり、後に秘書監に昇ったそうです。八四三年の夏、同僚の段成式、張希復とともに長安の寺々を調査して廻り、休憩のときに聯句をつくったりしますが、永寿寺で、符がまず「閑中好」ではじまる詞を作り、他の二人もこれにならい、それが「閑中好」という詞調の初めとなりました。段成式がその随筆集の『酉陽雑俎』に書き留めています。

のんびりと　〔唐〕鄭符

閑中好
尽日松為侶
此趣人不知
軽風度僧語

のんびりと
いちんち　松が友
こんな趣き　ひと知るまい
そよ風がはこんでくる　僧のことば

次は、ほぼ同じ時代の皇甫松。この人は李賀の年長の友人だった皇甫湜の子で、「僧に酒を勧める」というような詩を作っているボヘミアン。くわしい経歴は知られていませんが、後代の詞人から「皇甫先輩」と呼ばれています。

たかどので　〔唐〕皇甫松

たかどので寝ていると
残月が簾のむこうに沈んでいった
夢にみるのは　秣陵でのかなしいこと
桃の花　柳のわたが　町いっぱいに散るなかで
双髻のおとめが笙のふえ吹いていた

秣陵というのは、いまの南京をさします。昔も今も、江南のもっとも美しくロマンチックな都市です。

ともしび消えて　〔唐〕皇甫松

ともしび消えて
屏風にほのかな紅芭蕉
夢にみるのは　江南に梅の実の熟れる日々
夜の船で笛ふけば雨さやさやと降りだしたこと
駅のほとり橋のたもとで語ったひと

夢江南

樓上寝
残月下簾旌
夢見秣陵惆悵事
桃花柳絮滿江城
雙髻坐吹笙

夢江南

蘭燼落
屏上暗紅蕉
閑夢江南梅熟日
夜船吹笛雨蕭蕭
人語驛邊橋